特集・大阪湾の環境保全と環境創造

特集にあたって

細 田 龍 介 *

大阪湾に流れ込む大小の河川の流域には約二千万人の人々が生活している。その一人一人に、

「あなたは大阪湾をきれいだと思っていますか？」と尋ねたとき「はい」と答えることのできる人は先ずいないと思っている。しかし、次に、

「この大阪湾をきれいにするためには、何に対してもし手をつけないで保全すべきだと思いますか？」と尋ねたとき、「はい」と答える人が相当数あることも判明している。筆者は、この二つの回答にある面では納得すると同時に、疑問を覚えずにはいられない。十年、十五年前の大阪湾の姿、即ち河口部は濁りやゴミで溢れ、航行する船の造る波しぶきは醤油のように汚れていた時代からみれば、今日では表層の水は澄んで来ており、少なくとも見た目には「きれい」になりつつあると思えても仕方がないと思う。その結果として、手をつけずにあるがままの姿で置いておく「保全」の方法が大阪湾にきれいな環境を取り戻すのに最良の方法であると考えている人がありと解釈している。

この考え方を間違いであると否定することはしたくないが、保全すべきは、良好な自然が保たれ、生態学的にみて種の多様性も良好な状態に維持されている環境であって、現在の大阪湾湾奥部のように水質、底質、生態系全てに亘って劣悪な状態に陥った瀕死の海域にあてはめて考えることには大きな無理のあることを認識する必要があると考える。勿論、大阪湾の中にも紀淡海峡周辺の一部の海域のように保全によって良好な環境を取り戻せるに違いない場所もある。いずれの場合にも、大阪湾を陸から眺めるのではなく、海からの視点で眺め、そこで何が起きているかの実態を把握し、その結果として何をしなければならないかを考え、実行する必要がある。

大阪湾ベイエリアの近代化は明治維新から始まったと考えても良いであろう。維新後臨海部には重化学工業が栄え始め、特に第二次大戦後のベイエリアが我国の復興を担ってきたことは歴史の教えるところである。この時期、臨海部では埋立に次ぐ埋立を行って、石油化学工業、製鉄、造船等の重工業の拠点を形成した。これに伴って人口の集中も起こり、国の経済発展にはたしてきた役割は非常に大きい。しかしこの時期に、埋立による浅場の喪失、産業・生活排水のたれ流し等

によって大阪湾にかけてきた汚濁負荷の大きさも極めて大きいのである。その後、1971年に水質に関する環境基準が制定され沿岸部海域の水質汚染には歯止めがかかり、更に数度に亘って起こった不況の結果、臨海部の工業用地は遊休化が進んで、工場排水に起因する汚濁負荷は減少したものの生活排水による汚濁負荷は減少したとは言えない。嘗ては、「豊饒の海」、「チヌの海」と呼ばれた大阪湾に、ほぼ一世紀の永きに亘って加え続けてきた開発圧力は大阪湾の富栄養化をもたらすと同時に、特に阪神間から大阪、堺にかけての湾奥部の底質の悪化を引き起こし、この海域では底生生物相は極めて貧弱な状態となっている。今日までの社会における経済効率重視の開発は必然であり、我々人間にとって否定すべきものとは思わないが、開発を通じて得てきた多くの教訓を認識する必要がある。

このような劣悪な環境を、海域の生態系の立場から改善していくためには、何らかの積極的な施策を必要とすることは明らかである。海からの視点、即ち、海に棲む魚や、貝、底生生物にとって棲み易い環境に積極的に改善することが必要なのである。表題の「環境創造」はこのように定義される。しかし、現在に環境が非常に悪いからといって、何をしても良いというわけではない、その海域の環境は本来どのような状態であるべきなのか、棲むべき生物の種は何であるか、その生物が棲み易い環境の目標はどのような状態か、その環境を創り出すための施策とは何か、等について十分な検討がなされなければならない。また、全てを人間の力で成し遂げられるなどと考えるのではなく、生物自身の持つ浄化能力を引き出し、持続させることのできる環境を創造することが求められる。

この特集では、大阪湾の環境創造を行うために避けて通ることのできない諸問題、すなわち、大阪湾の環境の変化の歴史、現在の大阪湾の環境が抱えている諸問題、サステナブルデベロップメントを前提とした環境創造のあり方、大阪湾における環境創造の構想、更にそれに必要となる個別の環境創造技術等について述べられる。

執筆に際して、大阪湾新社会基盤研究会のアドバイザーとして日頃からご指導いただいている、京都大学名誉教授門田 元先生に心から感謝の意を表します。また、各項の執筆内容は、大阪湾新社会基盤研究会、環境創造分科会委員諸氏の日頃の努力に負うところが大きいことを記して感謝いたします。

*大阪府立大学 Ryusuke HOSODA